

先生が関わるとき

高橋 陽子

連続して子どもたちを見ていると、その成長になかなか気づかないことが多い。「気になる」ことが次々に出てきて（『幼児の教育』第九十九巻第七号 二〇〇〇年）、立ち止まってしまふからだろうか。

子どもたちの遊び出しの様子や、遊んでいる時の子どもも同志の関わりについて、他の職員が話してくれる

ことがある。私がいたら、へまた〇〇君ばかり主張して、と気になって口を挟んでいたかもしれないことや、「こうしたらいいんじゃないのかな」と遊びが長続きするだろう方向を私の考えで言ってしまったかもしれないことが多々ある。話して下さることは、結果がもう出ていることであるから、頷きながら聞い

ていられるが、私がクラスの子どもたちを前にして同じようにできるか、といえば、難しいと思う。

年長三学期、二月末のこと。二人の男児が登園してからすぐに、保育室の三分の一ほどの広さのコート室に向かつて走っていくのがわかった。コート室は、保育室から離れていて、一グループがいると、余程仲が良くなければ入り込めないような空間である。密やかに遊ぶにはもってこいの部屋、担任にとつてはなかなか見に行けず、見に行ったら行つたで、雰囲気を変えてしまうようなそんな部屋である。

二人は年少組からの知り合いである。Aは、穏やかに、遊びを考え出したり工夫したり生活力のあるタイプである。Bは、入園当初よりあまり気持ちを出さず、遊びに没頭することも殆どない。何をしたいのかはつきりせず、人についていくタイプで、ゲームやテレビの話をするので、そこにいられるようなところもある。

しばらくして二人が気になったのでコート室に行つてみる。そつと覗くと、ごろごろしながらおしゃべりしている。私の視線を感じて目が合うと、(何しに来たんだ? また何か言われるのかな)といった表情で、話をやめた。そばに新聞紙を巻いて作った棒と、ガムテープを丸めて作ったボールがあった。それは前

日年中組が使っていたのを知っていたが、私はゴルフのようにしてみる。二人は興味を示して、「やらせて」と言ってくる。ゴルフは知っていると云うことなので、「ボールがあつたらいいんじゃないかな?」と提案してみるが反応せずに続けている。私は適当な箱とガムテープと新聞紙を持つて戻る。箱をサッカーゴールのような向きで、固定する。「スタートの場所があつた方がいいよ」という声にはAが動いて、ガム



テープでラインを引いた。

少しして年中兎が、「返して」と来る。こうなることを予想していたので新聞紙を前もって持ってきていた。すぐに、「一緒に巻いて作ろう」と言うが、「もういいよ」と言いそうな雰囲気だったので、私が巻いて作る。ボールは面白がって作った。途中で、CとDが来る。ともにAに親しみを持っているが、CとDの二人はどうも合わない。口達者で、人の気持ちを考えずに、土足で踏みこむようなところがある。Cが、三月生まれで言葉のはつきりしないDを小ばかりにすることがあった。うまく反論できずに顔を真っ赤にして怒るDを、Cが更にかからかうことも見られた。そのことで、Dが登園を渋ることがしばしばあるほどだった。

後から来た二人が加わり、順番を決めて打ち、何回で入った、と楽しそうに言っている。友達の打数を気にして、自分より少ないと素直に「すげー」と言い合っている。私はへ自分に目標を持ち、友達の成果を

素直に喜べるような姿がこのまま続いて欲しい〜と思いい、得点表を作ってくる。長く続くことを願って、十回りは書けるようにした。また、私がいなくなっても子どもたちだけでも続けられるように、何打で入ったかの数字だけを書き込むようにした。二回りして、私はいなくなった。

時々「〇〇が一回で入れた！」と興奮気味に報告してきた。しばらくして、AとBが「CとDがケンカをしている」と言いに来る。覗きに行くと、Dは泣いていて、あとの三人はゲームを再開している。「Dが泣いているのだから、ちょっと待ってよ……」と言うと、手は止まる。どうも、Dがふざけて邪魔をするので、Aが棒でたたき、Cがきついことを言ったらしい。Dに理由を言わせて思いをぶつけさせて、四人で考えてもらう方法もあったかと思うが、CとDに怒った声を出して欲しくはなかったし、Bの楽しそうな気持ちをおおにしかかった。Dは、Aも怒ったことで、

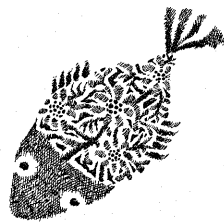
自分のしてしまったことの重要性は身にしみて分かっただろう。「二人が泣いている時は、さ……」と言うと、「わかった。ごめん」とAが言って、再開された。あと少しで表が終わりそうだったので私はその場に残った。表の書きこみは殆どBがしていた。声もよく出ていたし集中して一打で入っていることが多かった。久しぶりにBの愉快そうな顔を見た。

このように遊びに始めから関わり、途中のトラブルに立ち合い、最後まで見届けたことで、一人一人の充実感を生んだとしたら、その子どももある程度知っている大人が関わることは、意味を持つ。

同じコート室での二月終わり頃の午後のこと。数人の男児が扉を閉めて電気を消して中にいる。どうもお化け屋敷のイメージらしい。ただ薄暗くして、入ってきた子どもに襲いかかっている様子。襲われる方も期待している感じがあり、遊びとしては成立しているように見えたが、襲われて、キャーと言いながら廊下を

逃げてくる繰り返し、幼稚園全体を落ち着かない雰囲気になっていることが気になる。お化け屋敷というと、衝立を向かい合わせに置き黒布をかけて、その中に入ってもらい、おどかすことはよくしてきました。それを私が提案すると、「それはすぐに終わってしまうからつまらない」と言ってくる。そこで「ダンボールをつなげて、トンネルのようにするのはどうかしら？」と言うと、Eがやる気を見せてダンボールやガムテープを取りに行く。実は前々から、ダンボールをつなげて、迷路を作ってみたい、と思っていたところだった。

というのも、三学期の前半に行った、保育カンファレンスで、年長組は大物製作に挑戦してみたという話がでていた。大物製作なら、大勢の人が関わり、い



つものは接点のない人同志が触れ合え、一日では完成できないことで、次の日への気持ちの継続が生まれ、完成したあとにも人が集まり更に新しいもの・ことが始まるだろう、ということからであった。自由感を持つ生活をしてきた子どもたちに育ちにくかったことである。大物製作は、二月の始めに牛乳パックで大きな家を作ったことがあった。言い出したのは男児だったが、続かずに女兒たちが引き継いで、卒業まで修理しては遊びを繰り返した。

ダンボールを筒状にしてつなげようと思う、がそれは倒れてしまう。何とか、つなぎ目をくの字に組むと倒れにくいことを発見する。

同じダンボールは、四個しかなかった。この短い時間ではちょうど良い数だと私は思っていた。Eはつなげることに夢中。二個つなげたただけで中に入り込んでおもしろがる二、三人。「大変だから、手伝って」と言いながらも、中に入りたくなくなる気持ちもわかり、

無理に出てくるようには言わなかった。今にも倒れそうではあるが、なんとか四個ともをつないだ時、男児Fが、「最後の箱の天井をあげて、中から階段であがつて上に出られて、そこからすべり台で降りるようになりたい」と言い出した。やっと完成だ、と思った時のその一言で、その場の雰囲気が一変変わった。

Fは、遊びを考えて実行する力がある。思うようになっていた時はいいが、こうなるべき、が強いため、そうならない時にカツとなり、自分を失ってしまうところがある。完成を目の前にしてのFの言葉に戸惑いを感じた。「もうここまでにしようよ」と回りは言ったが、Fは自分でダンボールや積み木を持ってきた。子どもたちから、絶対にいやだという声があがらなかつたので、天井をくりぬくなど、私も手伝った。すべり台のすべる部分をダンボールにしたので、足をかけた途端つぶれた。それでも、下に積み木を入れて支えることで、まっすぐにはいかないが、何とか下まで

すべることができるようになった。

殆ど手伝わずに見守っていた子どもたちも、できあがると楽しそうに遊んでいた。私は（Eは、こういうものを作りたかったわけではないんだよね）と思いがらも、Fの一人舞台を何も言えないまま見守っていた、という複雑な気持ちで、その場を去った。

片づけとなり保育室に運ばれてきたダンボールのトンネルは、ばらばらになっていた。理由を聞いたようにも思うが、覚えていない。

三月に入り、弁当時にFがEを含む数名の男児に向かって怒り泣きし暴れていた。とても話して収まる状態ではなかったのでFを違う場所に連れて行き、落ち着くのを待った。お弁当を食べるのも、残りわずかと言うことで、好きな所で食べようと決めた日のこと。ちようどFが日直の日で、自分は遊戯室で食べるが、他の場所でもいただきますをいって回らなければと思っていたのだろう。私はそれぞれの場所で、全員が

そろったら食べていいわよ、と伝えていたので、FがEたちのいるコート室に来たときにはもう食べ始めていたのである。日直である自分が行く前に食べ始めていたことをとがめると、反対に責められてしまったようである。Fを遊戯室まで連れていき、コート室に戻ると、口々にFに対する今までの不満などを言うてくる。

その中に「Fは、嘘をついたことがあるんだよ」「?」「迷路が壊れちゃった時、本当はFが壊したんだよ」と言うのだ。私は、「じゃあ、もう一度作ろうよ」言うしかできなかった。Eが一番に賛成してき

た。
今回は、保育室前の廊下で作ることにする。前とは違うメンバーにも声をかけ、単純なトンネル状の迷路



を作ることを提案。工夫するのはそのあとで、と確認し合う。

Eは「おい、誰か持っていてくれ」と言うなどほりきっている。あとからFが来て「ここは間をあけて」などとしきろうとしている。Eが「これはしかけはなんだよ」と言っている。Fの顔色が変わったので私も「あとから来たら、まずどうやるか聞いて始めようね」と伝える。Fは外観は手をつけず、内部の細工を始めた。Eはしつかりつなげることに、一人は倒れないようにすることに没頭している。完成したらどうやって人を集め、通らせてあげようかなどを考えている人もいる。

さて次の日。廊下から遊戯室に場所を移動する。一本道から二またに分かれるようにダンボールをついだり、外に出してしまう扉を作ったりした。Eは、というと、チケットを作り、配り歩いている。Fは「入り口はこちらです」「はい、少しお待ちください」など

言って、受付け係をしている。中でおどろかす役も数人いた。作っている時からすぐに中に入ってしまったいた人たちである。誰が何をやるか、話し合って決めたわけではない。自分が自分のやりたいことを考えて、来てくれた人を楽しませるために、精一杯のことをしていたのだ、と思う。

ゴルフ遊びもダンボールの迷路作りも、やるのは子ども一人一人である。先生が「やりましょう」と言うのではなく、誰か一人が決めてしまうのでもない。それぞれが自分の持つイメージや、持っている力を出しきって、集結していった時に、より充実したものを生み出していく。

集結しようとしている時に、ちよつとずつ調整しながら、つないでいくのが、先生が関わっていることの意味なんだろう、「気になる」からそこにいる、だけではないことを、実感した出来事だった。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)